

## 《書評》

今年度も多くの方々に書評を寄せて頂きました。どうもありがとうございました。なによりも、今回は静岡県立大学の学部生2名の書評があります。このように、研究者による研究者のためだけのものではなく、学生の皆さんにも、一つの挑戦、新しい試みの場として書評が機能していくことは非常に健全なことだと感じています。中部支部の本書評では、必ずしも研究書や専門書などに限らず、ここから新たなコミュニケーションが始まるような、そんな書評の空間を目指しています。今回は計7本の書評を寄せて頂きました。コミュニケーションの学際性が改めて感じられる書評になっていると思います。ぜひ、お楽しみください。

- ◇ 書評は寄稿者の名字/Last Nameを「あいうえお順」に並べてあります。
- ◇ 編集作業は、2月下旬に行いますので、それまでに、原稿をいただけたらと思います。原稿は、宮崎までお送りください。送付先：arata(アタラク)meijo-u.ac.jp

- .....
1. ダニエル・ピンク [著] 『人を動かす、新たな3原則—売らないセールスで誰もが成功する！』(神田昌典 [訳]) 講談社 (2013年) [Pink, Daniel. (2013) To Sell is Human: The Surprising Truth About Persuading, Convincing, and Influencing Others. NY: Canongate Books.] 【久保田絢 (愛知淑徳大学教員)】
  2. Michael Dues, Mary Brown (2003) *Boxing Plato's Shadow: An Introduction to the Study of Human Communication* McGraw-Hill 【近藤恵梨奈 (愛知淑徳大学大学院 グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科 博士課程前期 2011年度修了生)】
  3. 白井聡 [著] 『永続敗戦論 戦後日本の核心』太田出版 (2013年) 【齊藤帆南 静岡県立大学国際関係学部 藤巻ゼミ生】
  4. Sacks, Oliver. (1998). *The Man Who Mistook His wife for a Hat*. New York: Touchstone. (サックス O. 高見幸朗・金沢泰子 (訳) (2009) .妻を帽子とまちがえた男 早川書房) 【平田亜紀 (愛知淑徳大学教員)】
  5. 施光恒 [著] 『英語化は愚民化—日本の国力が地に落ちる』集英社新書 (2015年) 【福本明子 (愛知淑徳大学教員)】
  6. 岸本寛史 [著] 『緩和ケアという物語—正しい説明という暴力』創元社 (2015年) 【宮崎新 (名古屋外国語大学教員)】
  7. 山口誠 [著] 『ニッポンの海外旅行 若者と観光メディアの50年史』ちくま新書 (2010年) 【静岡県立大学国際関係学部 藤巻ゼミ生 村松真衣】

ダニエル・ピンク [著] 『人を動かす、新たな3原則—売らないセールスで誰もが成功する!』(神田昌典 [訳]) 講談社 (2013年) [Pink, Daniel. (2013) *To Sell is Human: The Surprising Truth About Persuading, Convincing, and Influencing Others*. NY: Canongate Books.]

タイトルを見てわかるように本書は研究書ではない。『ハイ・コンセプト「新しいこと」を考え出す人の時代』(2006年)、『モチベーション3.0 持続する「やる気」をいかに引き出すか』(2010年)といった世界的なベストセラーを生み出したキャリア・アナリストのダニエル・ピンクによるビジネス書である。このような大衆受けするビジネス書をコミュニケーション学会のニューズレターの書評で取り上げるのは場違いであると思う方もいるだろう。

しかし私はコミュニケーションを研究する者にも一読の価値のある書であると考えている。本書を読むことで過去から現在、未来への「セールス」のあり方の変化を俯瞰的に捉えることができる。ピンクは世界中のビジネスパーソンに強い影響力を持っており、「ダニエル・ピンクの新刊は3年後のビジネス界の常識をつくる」と言われるほどである。2013年に出版された本書で述べられている内容は、今日の「セールス」事情を見事に言い当てている。その予測は、労働統計局による職業別就業者統計プログラムの報告書などの公的な統計資料や企業への聞き取り調査、さらに社会学、経営学、心理学、芸術をはじめとするさまざまな分野の研究成果に基づいて編み出されたものである。

「セールス」といっても本書では「誰かに何かを買うように説得する」行為のみを指しているわけではない。すべての人が何らかの形で日々行っている「他人を説得する、他人に影響を与える、他人に納得してもらう」行為に至るまでピンクは幅広く「セールス」と捉え、それを「売らない売り込み」と定義する。ビジネスに関連する事例が中心とはなっているが、

医療や教育における「セールス」も本書では取り上げられている。経済・経営に関心のある方はもちろんのこと、説得コミュニケーションに関心のある方にもお勧めである。本書を読むことで、今後の経済社会における説得コミュニケーションのあり方を考える上で有益な知見を得ることができるであろう。

本書で興味深かったところをいくつか挙げると、まずは現代では誰もが「セールス」に携わっているというピンクの主張である。本書は今日のデジタル世界で「セールスマンの死」を告げる「死亡記事」への反論から始まる。「キーボードを少したたくだけで、誰もが何でも見つけられる世界では、セールスパーソンのような仲介者は余計な存在だ」という主張は一見、説得的なように見えるが、セールスパーソンは減るどころか、その数は増え続け、現代では誰もがセールスに関わっているとピンクは主張する。その根拠の1つはアントレプレナー(企業家)の増加である。もう1つの根拠は、従来は一個人が担当してきた職務機能の多様化である。かつての組織は細分化され、経理担当者なら経理業務だけというようにスキルは固定化されていた。しかし経済状況が不安定になり組織の再編が続く中、以前より一個人は多種多様な仕事をこなすようになった。そして「スキルの弾力性」が一般化するについて、どんな分野でも必ず必要とされるのが他人を動かすというセールスのスキルであるというのである。

次に興味深いのは、「セールス」が「強引」「不誠実」「うさんくさい」といった形容詞を連想させるネガティブなものから「共感」や「奉仕」と結びつくポジティブなものへと変化しているという主張である。この最大の原因はインターネットやスマートフォンの普及であるという。かつて売り手と買い手の間での「入手可能な情報の非対称性」が存在していたときには、相手を自らの都合のよいように言いくるめるセールスが横行していたが、インターネットやスマートフォンの普及により、

買い手が入手できる情報量は格段に増加し、買い手はそれを許さなくなった。売り手に求められる能力はいかに自分の考えを効果的に伝えるかではなく、いかに相手の視点を理解しながら話を聞き、効果的な質問をし、相手の置かれた状況や課題を明確化し、win-winの解決策を導き出していけるかに変化した。このようなセールスでは、いかに相手の置かれた状況や社会をよくしたいかという利他的奉仕の精神を持っているかがカギになるとピンクは結論づけている。

本書は前半はセールスのあり方の移り変わりについて、後半は現代の「セールス」に求められる特質・スキルについて書かれている。さまざまな具体的な事例がつなぎ合わさり展開される特徴的な構成になっている。個別の事例は読み手を惹きつける物語調で語られている。多様な事例の組み合わせで一本の筋の通った主張を260ページの本にまとめ上げてしまうのだから、クリントン政権下で副大統領の首席スピーチライターを務めた経験を持つピンクの文章力はさすがというほかない。また、セールスの現場はイメージしにくいものであるが、豊富な事例により読者は具体的なイメージができるようになっている。さらに、本書の第2部、第3部の各章には「サンプルケース」と称し、「セールス」の技術を磨くためのヒントやエクササイズ、推薦書籍などが数多く紹介されている。これらを授業教材として活用することも可能である。

本書を通じて読み手が「セールス」の流れを掴み、そこではどのようなスキルが必要で、どうしたらそれらが身につけられるのかという情報も得られるように書かれた読み手に極めてやさしい書である。

久保田絢（愛知淑徳大学教員）

## Michael Dues, Mary Brown (2003) *Boxing Plato's Shadow: An Introduction to the Study of Human Communication* McGraw-Hill

アメリカの大学で教鞭を執る教授から、基礎演習の教材としていた本書を勧められた。100ページにも満たない薄い本である。主にレトリック分野と社会科学の側面から、コミュニケーションという学問が成立した歴史背景を読みやすく簡潔に説明している、入門書として申し分ない構成になっている。

献呈の辞にある Robert Gunderson 博士は、かつてコミュニケーション学を"discipline of refugees"と呼んだ——そんな文から序章が始まる。毎日誰もが何らかの形で行っているコミュニケーションは、西欧での長い歴史と多大な重要性を持つにもかかわらず、学問上の共通目標を定められないという他学問にはない矛盾を抱え続けている。その結果のひとつとして、コミュニケーション学を主な学問の副次的な選択にしてしまう研究者が多いことに繋がっている。とはいえ、この学問の根幹は2500年前にも遡り、時代と共に形を変え、発展し、受け継がれてきたのである。ここからは5章に分けて、コミュニケーション学を時系列的に辿っていく形になる。

第一章の舞台は古代ギリシアで、コミュニケーション学の始まりを論じている。争っている二者が主張し、第三者によって採決される *adversary system* が生み出されると同時に、効果的な説得を教える役割をレトリック（修辞/弁論術）を学んでいたソフィストが担ったという土壌が出来上がる。偉大な哲学者で有名なソクラテスは人間交流の理想を掲げ、彼の後継だったプラトンも弁論術を教えるソフィストに反して「真理/Truth」を探求すべきだと主張した。その一方で、アリストテレスはレトリックの価値を見出し、『弁論術』を著してその基本的な知識を理論・体系化し、西欧文明を成す大きな柱となった。ただ、そこには情報伝達といった善的と同時に欺瞞として悪的に

使われ続ける疑いがあるレトリックという、プラトンの投げかけた影が絶えず覆っている。

第二章にある解説は、アリストテレス以降から20世紀までのコミュニケーション学であるが、ほとんどの注目はレトリック関連に集まっている。ローマ帝国の崩壊で、ローマ人が吸収していたレトリックの知識も失われたため、中世ヨーロッパにおける知識は限定的だった。その復刻に貢献したのはムーア人であり、スペインのトレドに建てた図書館に、アリストテレスなどの著作も含むアレクサンドリア図書館にあった多くの作品を翻訳・複製して所蔵させた。古代の知識を取り戻したヨーロッパは後にルネサンス、印刷技術の発明と華々しい進展を遂げる。1690年にジョン・ロックが *communication* の語を英語に持ち込んで以降、18世紀から19世紀はレトリック教育がイギリスとアメリカで盛んになり、現代レトリックの基礎を築き上げた。特に19世紀終わり頃には、アメリカのほとんどの大学がレトリックとパブリック・スピーキングを教えるまでになったが、一学問のコミュニケーションとしてはまだ見なされなかった。

第三章では20世紀中におけるレトリック学者達の功績と共に、いかに学問としてのコミュニケーションが発達したかを掘り進めていく。アメリカの学部内では1930年頃から新アリストテレス主義の広まりにより、パブリック・スピーキングやディスカッション、ディベートなどの実践技法が授業内容に加えられる。1965年頃には新アリストテレス主義が衰退したが、議論学/*Argumentation*、批評理論/*critical theory* やポストモダニズムなど、複数の新たな理論へと続いた。

第四章では、コミュニケーション学を形作っているもうひとつの領域、社会科学的手法の歴史概要を述べている。問いを立て、観察し、解答に有効な再現可能な理論を構築する。以上の三過程を辿る社会科学は、普遍的真理がある仮定上でその発見のために、量的研究法と質的研究法に代表される経験的観察法を用

いている。コミュニケーション学における社会科学は、技術革新や二度の大戦があった数十年で大発展を遂げた。関連したマス、小集団間、インターパーソナル・コミュニケーションの分野は形成の道筋を整えられた後、応用コミュニケーション研究もそれに続いた。

第五章ではこれまで述べてきたことをもう一度まとめつつ、コミュニケーション学のこれからという名目でいくつかの挑戦を細分化して書かれている。物理化学より"ゆるい"とされる社会科学、多様な状況や文化と真理との折り合いの付け方、そして流動的とも言える情報技術に従うように変化するコミュニケーションなどである。学部を超越するコミュニケーションは、プラトンの影と共存しつつも、より深い交流、理解力、そしてより良い生活を望める学問であると書いて本文は終了する。

本書はコミュニケーション学の簡単な総覧ではあっても、その完全な歴史を網羅しているわけではないと著者は述べている。しかし、アメリカの国内コミュニケーション学会の前身は、レトリック研究者による学会であった。その事実からすると、レトリックと社会科学の側面から、コミュニケーション学を論じた本書の持つ説得性の強さは言うまでもないだろう。入門書は概念や手法が横並びで紹介されやすいが、本書のような各々のものに詳しい経緯がつけられているものはそれ程多くない。それらが平易な英語を意識して書かれているため、アメリカの大学生にとって最適な入門書となっているのも非常に納得がいった。寧ろ、翻訳のないことが不思議なくらいである。ただ、第三・第四章はアメリカを通したレトリックや社会科学の解説のため、若干専門的である印象を受ける。筆者自身もかつて属した分野によるものか、レトリックはどちらかといえば硬派な言語学に近く、社会科学もまた身近ではない領域のイメージが強かった。それであっても、歴史解説によって補強された本書は新鮮であり、流れるように読めるまとめや専門分野一覧、図表もまた分かりやす

かった。学問的なコミュニケーションについての曖昧さが薄れたわけではないが、レトリックや社会科学の分野がコミュニケーションと近いものであること、そして、再びコミュニケーションという学問を様々な側面から学ぶことの重要性の認識を得たことで、一種の知識整理がついた。正直に言えば、もっと以前に読みたかったと思わせた書であった。

近藤恵梨奈（愛知淑徳大学大学院グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科 博士課程前期 2011 年度修了生）

---

白井聡 [著] 『永続敗戦論 戦後日本の核心』  
太田出版（2013 年）

この本のタイトル、『永続敗戦論』を初めて目にしたとき、私の頭の中にははてなマークが浮かんだ。確かに日本はアジア太平洋戦争において無条件降伏をした。しかしその後高度経済成長期を経て、経済大国と呼ばれるまでになり、今となってはアメリカにとってなくてはならない存在になったのではないか。かつての敗戦国としての日本の面影など微塵も見られないし、ましてや「永続的に「敗戦」とはどういう事であろうか、と思ったのだ。しかしそれこそが、本書で筆者が指摘する「永続敗戦」という状況の中核を担う、「恥知らず」の日本人に深く浸透する間違っただ集合意識であった。

「永続敗戦」とは、「戦後を終わらせる」ことをしないがゆえに、戦後、つまり敗戦後が永続的に続くことを意味する。敗戦は二重化された構造からなる。ひとつは「敗戦の帰結としての政治、経済、軍事的な意味での直接的な対米従属構造が永続化される」(p47) ということ、もう一つは「敗戦そのものを認識において巧みに隠蔽する (=それを否認する) という日本人の歴史意識・歴史的意識の構造が変化していない」(p47) ということである。筆者はそれ

が明らかになっている例として「終戦記念日」を挙げている。8 月 15 日を我々は「終戦」記念日と呼び、戦争の終わった日として認識しているが、正確には日本が「敗戦」を認めた日だ。「敗戦」と呼ばず「終戦」と呼ぶ日本人の認識における隠蔽こそが、戦後日本のレジームの根本にあるものだと筆者は指摘する。

このような現状に対して筆者は、「我々の知的小および倫理的な怠惰」が理由だとし、『格人が自らの命を懸けても護るべきもの』を真に見出し、それを合理的な思考によって裏付けられた確信へと高めること」が重要だと言っている。先に述べた対米従属に対しても「問題は、それ(米国の国益追求)を進んで受け入れ、あまつさえ積極的に手引きしようとする知的にも道義的にも低劣な人々がいること、そして彼らが指導的地位を占めていることにほかならない。」(p135) と日本の政治家が無知ゆえにとってきた対応を強く批判している。私自身この本を読み、自分の暮らす日本という国のことを全然知らなかったのだととても恥ずかしく感じた。私たち一人一人が、自分たちのためにこの国についてよく知り、認識を変えていくことが現状脱却のためには不可欠だ。

最後に、2013 年 9 月 20 日のメールマガジン『オルタ』に掲載された「永続敗戦論からの展望」と題された記事の中で、筆者は『永続敗戦論』刊行後の事態について「いずれの事象も本書で私が示した構図が真実を抉ったものであることを証明している。」と述べている。これは安倍首相訪米の際のオバマ大統領の冷遇や排外主義の跋扈をうけて書かれたものであるが、この本の中で述べられた私たちの認識も対米従属関係は今も変化しておらず、そしてその限り、我々は「永続敗戦」したままなのである。

齊藤帆南

(静岡県立大学国際関係学部 藤巻ゼミ生)

**Sacks, Oliver. (1998). The Man Who Mistook His wife for a Hat. New York: Touchstone. (サックス O. 高見幸朗・金沢泰子 (訳) (2009). 妻を帽子とまちがえた男 早川書房)**

オリバー・サックス (Oliver Sacks) 著の『妻を帽子とまちがえ男』は、脳に起因する何からの障害をもった患者たちの記録である。サックスは 2015 年に死去した著名な精神科医・学者だ。ノンフィクション作家としても大変有名で、その文体が親しみやすく、多くの著書が世界中の人々に愛された。本書は、研究の報告と位置付けられているものの、娯楽書としての地位を確立しており、改めて紹介する必要はないのだろう。しかし、これを医療コミュニケーションの文脈で改めて読み進めると、著者の報告は、また違った一面を見せてくれる。

断っておかなければならないが、サックス自身は本書を娯楽書としては位置づけていない。研究報告として位置づけ、彼が臨床で得た経験を世間に発表することで、少しでも後進の育成に貢献すればよいと書き出している。しかし、その位置づけはかえって読者を混乱させるように思えてならない。なぜなら一読しても〈何の〉研究の報告かがわかりづらいからだ。むしろある特定の知識層に分類される一般人が好みそうな本を出版したといわれた方が腑に落ちる。「少しわからないけれど、その領域に触れさせて分かった気にさせてくれる」本、あるいは、好奇心を刺激する専門用語がちりばめられたその文章で無知な自分の休日の時間をあやどるにふさわしいと読者に思わせることを目的にしている本だと表現するほうが適切かもしれない。

本書は、およそ健常者が体験しないような日常を生きている患者との対面の記録が 24 話、4 つの章立てで語られている。健常者にとっての〈非日常〉は読者にとっても興味深く映るだろう。ある特異な——という表現をサックスは慎重に使用するべきだと主張するのだが——症状を抱えるがゆえに、社会の行動規範から

逸脱した彼らの日常の描写は丁寧で、〈健常者〉にはときにコミカル写り、そしてだからこそ憐憫の情を誘う。

しかし繰り返すようだが、これがどれほど報告としての性質をもつのかと問われると、議論を呼びそうだ。医療人類学というには、患者の内面に切り込むような応答やナラティブや前後の個人史に関する描写がやや欠落していることは否めない。たしかに場面ばめんにおけるサックスと患者の対話やそのときの患者の非言語 (cue) は細かく語られており、鮮明に読者の脳裏に再現されるのだが、それらの情報をもとにした患者の行動分析が報告されているわけではない。ゆえに患者の認知する世の中の「手触り」のようなものが伝わりづらい。ある種の異質さばかりが強調されているともいえる。

しかし読み進めると、ここにこそ彼の医師としての強靱な意志と倫理観が反映されていることに気が付かされる。『ただよう船乗り』において登場する記憶に関連した障害を患者との対話のときに医師である彼は患者に対し人生が楽しいかと尋ねたあとに「やりすぎかな、と思って私は躊躇」(p. 79) するのだ。医師も迷う。そのことを恥じることなく記しているサックスの姿勢は真摯だ。学術的ではないが目の前の患者の最善となるための言動を探る姿勢は〈やさしい〉という表現が最も適切かもしれない。そして同時に〈研究〉と称して患者の精神を切り刻む人々を婉曲に批判する。

サックスは目の前の患者を傷つけてはならないという大原則にのっとり、その制約の中で過去の文献と照らし合わせ、自身の次の行動の選択が対面する患者へどのような影響をもたらすかを吟味し、ときに困惑し、選び取った行動の結果を報告している。後進のためになるからと、患者へ不必要な負担のかかる行動にせず自戒する姿は学ぶところが多い。この点において、この書は患者の行動を理解するための心理学系統の本ではない。医師が患者と対面する中で自身の内面を見つめ、行

動を選択し、そしてその結果を報告しているコミュニケーション研究の本であるといえよう。

平田亜紀（愛知淑徳大学教員）

---

## 施光恒 [著]『英語化は愚民化—日本の国力が地に落ちる』集英社新書（2015年）

私ごとではあるが、2016年4月から本務校内で所属学部が変更になる。好むと好まないに関わらず、英語で専門科目の授業を実施することとなっている。英語の公用語化をめぐる議論については、これまで少し読み考えた程度ではあるが、これを機会に自分の立ち位置やら心がけるべきことを考えてから教壇に立ちたいと思い、そのきっかけとなるかと考え本書を選定した。

本書は、政治学者の施氏により、日本の公用語を英語とする、またはその方向性への動きである日本の「英語化」に関する施策について、国際関係、政治、経済、文化、哲学、歴史などの観点をふまえ、異論を唱える書物である。

まず、第一章「日本を覆う『英語化』政策」では、小学校での早期の英語導入、中学でのオールイングリッシュでの授業実施の動き、スーパーグローバル大学認定校への補助金投入など、財界の要請を受けた政府、特に文部科学省が推進する英語化の教育政策が紹介されている。

次に、第二章「グローバル化・英語化は歴史の必然なのか」と第三章『「翻訳」と『土着化』が作った近代日本』では、グローバル化のための英語化は、歴史に逆行していると施は指摘している。地域限定的な言語（現地語）から、英語という普遍的な言語を使用することが、進化の流れであるという前提が、現代の「グローバル化史観」にはあるが、歴史上では逆に、普遍的とされるラテン語から現地語に翻訳することで、特定の階層に独占されていた知識

や教義を、より広く社会に広め、平等で公平な社会を築くことに貢献してきたという。日本においても、明治維新以降、外国語を日本語に翻訳し、「土着化」させながら法体系や社会制度に取り込んできたがゆえに、現在の豊かな日本語の体系と制度が構築されてきたという。その結果、教育の質も高まり、高等教育まで母語で国内で受けることができ、多数の一般庶民が多様な知識に触れ、認識を広め、社会階層をまたいだ知力を獲得でき、創造力の豊かな国民が育成できたという。その結果、より平等な社会が構築されてきたと施は展開する。

第四章「グローバル化・英語化は民主的なのか」では、母語に根差した社会空間が個人の自由の保証に重要であることを施は指摘している。EUのような複数の言語と普段から接するような環境の国民でさえ、複数言語に堪能なのは一部のエリート層であるという。また、民主政治の条件として、人々が現地語で身近な問題を深く考え議論できること、共通の言語により連帯意識を持つことの重要性を指摘している。政治が社会の公正をめざし、富の再分配を行う機能であればあるほど、この連帯意識の重要性の指摘もある。

続いて、このような文化・社会・政治的に重要な母語の存在を脅かす黒幕として、新自由主義者たちの存在が、第五章「英語偏重教育の黒幕、新自由主義者たちの思惑」にて指摘されている。言語や文化をグローバル化の障壁とみなすリベラリストは、英語化を推進することで世界の普遍化をめざし、市場原理を優先しやすい社会を目指しているという。英語教育改革の狙いとしても、世界市場を奪取できる人材の育成、海外投資家に好まれる環境づくり、のためであり、学問の発展や生徒の将来の幸福のためではないと厳しく指摘している。例えば、「言語帝国主義」の批判を行う言語学者らの論を紹介しつつ、オールイングリッシュで授業を行う「直接教授法」も教育効果よりも商業上の理由であることを提示している。

第六章では「英語化が破壊する日本の良さ

と強み」として、思いやりの道徳・日本らしさ、ものづくりを支える知的・文化的基盤、良質な中間層と小さい知的格差、日本語や日本文化に対する自信、多様な人生の選択、の5つを上げている。人間関係、経済・文化活動、アイデンティティなど多岐にわたるものが英語化によりダメージを受けると展開している。

第七章「今後の日本の国づくりと世界秩序構想」では、英語の母語話者を頂点とする、英語の言語能力による序列化された国際社会の危険を指摘している。津田幸雄氏の「英語支配の序列構造」を紹介しつつ、英語の母語話者の国が一方的に有利となる国際社会の形成に日本の英語化は手を貸していることになる、と施の指摘は手厳しい。代わりに、施は「積極的に学び合う、棲み分け型の多文化共生社会」を提唱している。コミュニタリアン的に、人間は母語やそれにより育成される文化を背負った存在であり、個人と言語・社会は不可分であり、そのことによりより自由に能力を発揮できること。よって、お互いにそれぞれの言語を含めた存在を尊重すべきであると。決して英語を学ぶ必要が無いと主張しているのではなく、母語の育む社会と制度を大切にし、それと同時にほかの言語や社会からも吸収をせよと示唆がある。ただ「翻訳」を通じて、自らの文化に取り込み、内在化、即ち「現地化」すべしという提言で本書は終わっている。

以上の章を読み考えたことは、結局は、平たく述べると、自らの文化や言語に誇りを持ち、母語での高次思考や創造力を活用し、それらを多くの人が発揮できる社会空間も大切にしながら、他国や他の言語・文化からも学ぶ姿勢をもつ重要性が指摘されているといえる。しかしこのような私のまとめ方では、そもそも経団連や文科省の提言しているいわゆる「グローバル人材」とどのように異なるのか、差異が見えにくくなる。そもそもの根本である個のあり方と言語の関係を、リベラリスト的に読むか、コミュニタリアン的に読み、議論を構築することの差のみではなさそうである。書

評という限られたスペースでは見極めきれないので、別の機会でもより深く考えたいと思う。

ただ、4月からの仕事に備え、一つ心にとめておくべきことは、言語学習とアイデンティティの関係は不可分であり、母語が積極的な役割を果たしているということだ。母語を軽んじるのを許すのではなく、かといって過剰に自民族優越感を抱かせるのでもなく、かといって、文化と言語の境界を絶対だと教えるのでもなく、被植民地根性をもたせない、開かれた英語での教育というものを模索してみたい。

福本明子 (愛知淑徳大学教員)

---

### 岸本寛史 [著] 『緩和ケアという物語ー正しい説明という暴力』 創元社 (2015年)

本書はそのタイトルからも分かるように、コミュニケーション学を主眼とした書籍ではなく、医療関連、とりわけ緩和ケア(がん医療)という現場の事例研究にもとづくものである。それでも即座に本書を手にとったのは、『正しい説明という暴力』という副題に強く共感を覚えたからである。正しく説明できる能力という文脈でコミュニケーションは近年ことさらに強調されているし、表現することや外国語教育の中にもその流れは強く表れている。しかし、そこで崇め奉られるような「正しさ」偏重に対して、違和感が自分の中で収まらない、収めたくないと常に感じているからだ。

かたや医学や医療現場での現実に「正しさ」を求めるのは当然のことであろうし、その文脈での医学的に担保された「正しさ」とは命に関わる正義のような、否定の余地のないもののようにも思われる。診断と治療を医療者が正しく行い、患者はそれを正しく理解することが求められている・・・ように思われている。

しかし、その「正しさ」とは、与える側の医療者と与えられる側の患者、という権力構造を前提とした医療現場で行われる「説明」とい



うコミュニケーションの中では多様化し、無自覚な押し付けは「倫理的暴力」となり得る (p.14)。これが刻々と迫り来る「死」という逃げようのない現実と対峙している緩和ケアの現場ならば、確固たる「正しさ」(と思われるもの)は、とりわけ慎重に、そして批判的に向き合う姿勢を維持しなければいけないことが明らかとなってくる。なぜなら(医学的)「正しさ」や「正しい説明」はそれ自体が必ず病気を治したり、患者に救いの手を差し伸べてくれるわけではないからだ。「正しさ」は答えではないのである。

著者は、がん医療(緩和ケア)の事例研究を通じて、絶対的支配を思わせる医学的常識や、それに基づく「正しい説明」というものに批判的に向き合い、病気を物語(ナラティブ)と捉え、患者・医療者・そしてその関係性から生まれる複数の物語(物語的真実)を認め、緩和ケアの現場における「正しさ」の意味を検証する。そして、このようなナラティブ・ベイスト・メディスン(NBM)に依ったアプローチは「医学的観点を放棄することではなく、患者の語りと医学的常識との「両者を同等の重みをもって聞き手のなかに収め」る態度を基盤とすることであると、医療者として、また研究者としての立場を明確にするのである (p.20)。

本書は、ナラティブ・アプローチによる緩和ケア実践の事例検証を通じて、そこに関わるひとびとやさまざまな経験の「意味」を脱・再構築する試みを行っていると言って良いだろう。医療者と患者は、必ずしも癒す／与える者・癒される／与えられる者という、固定された従属関係の存在ではない。それぞれが物語の語り手(主体)であり、交わされるコミュニケーションは診断に必要な情報収集や報告のための道具的で静的なものではなく、物語が紡がれるダイナミックな対話の場なのである。これを踏まえれば、「緩和」を医学的に捉えて「痛み」は和らげる・取り除くべき対象として見／診／看ることが正しいのか。患者の訴える身体的な痛みを正しい薬の処方によって緩

和することが、常に適切な対応なのか。逃れられない病(やまい)の医学的な意味は、患者の「病(やま)うこと」という経験と同義なのか。着実に近づきつつある「死」に対して医療者と患者は同じ歩幅、つまり同じ時間のなかで向き合っているのか、そして、歩みの先に同じ終着点(つまり「死」の意味)を共有しているのか。これらのような、医学的見地からすれば副次的と思えるような事柄の物語的真実が、患者、そして医療者とのナラティブの中からはっきりと立ち上がってくるのである。

上述したテーマは章立てされて論じられているが、論集の性質から読みやすさやまとまりの違いが多少あることは否めない。しかし、読み手それぞれが興味をひかれるテーマを中心に読み進め、医療の物語的な理解に近づく手立て(ナラティブ・アプローチ)を提供することからも、医療関係者に限定しない読み手に寄り添った構成であると言えるだろう。がん医療(緩和ケア)への馴染みの度合いにかかわらず、現場にいるとむしろ見えづらくなってしまいう可能性が高い事柄を、医学的な意味とは異なる物語的真実として丹念に記述している。

このように、医学的見地を批判的に再考察する際には読み手が留意すべき点もある。すべてのナラティブ・アプローチをとる研究に共通して言えることではあるが、複数の物語的真実を前提とする以上、本書における事例も主張も絶対的なものではなく、一つの物語として読まれることが重要になってくる。そして、著者自身なんども繰り返すように、このことは、これまでに明らかとなった科学的根拠をないがしろにしたり、医学的知識の蓄積を軽視するものでもない。著者は、対話というコミュニケーションを医療と捉え、生死にかかわるような判断が常に求められる状況の中でも医療者と患者それぞれの物語を同一線上に置きつつ、既存の常識を一度「括弧に入れる」(pp.19-20)ことの必要性を訴える。そして、なにかを絶対的に正しいという姿勢で状況を

とらえたり押し付けたりせずに、「『まず聞いてから考える』というスタンスを可能な限り持ち続けようとすることに尽きる」と主張するのである (p.213)。

医療関連の書籍ではあるものの、専門用語などは最小限に抑えられ、事例研究の特性から分野外の読み手にとっても比較的読みやすく書かれている。特に、「正しい説明」というキーワードへの批判的考察という点から鑑みてコミュニケーション研究への示唆も大きく、ここでは本書の教育上の意義を二点挙げたい。

一つ目には、近年その重要性が強調される「説明」というコミュニケーション様式への柔軟で批判的な姿勢の提言である。世間やメディアでもはやされる「よいコミュニケーション」とは、正しく、分かりやすく、相手に伝わるような論理的なコミュニケーション (=説明) を正解とする、排他的で直線的な価値観に偏り過ぎているきらいがある。そのような文脈では、たとえば「コミュ障」- 差別的で医学的根拠に乏しい流行語- が無批判に広まってしまいうように、コミュニケーションや人間・対人関係へのためらいや苦手意識を、一様に矯正すべき・排除すべき悪しきもの、という絶対的で暴力的なコミュニケーション観でしか判断を許さなくなってしまう。死を現実としながら、患者と医療者の間に生まれる「コミュニケーションのずれ」 (p.32) への批判的な着目から、「ずれ」そのものはコミュニケーションの失敗や不全と同義ではなく、そこに生まれる物語的真実の意味を見出す契機を与える可能性がある。このようなコミュニケーション観は現在のコミュニケーションの流行の中でもっとも欠けてしまっている点であると言え、教育的意義が非常に大きいだろう。

二つ目に、緩和医療という「死」を見据えたテーマを扱う本書はナラティブという概念への入門の補足的資料として有効であろう。ナラティブ・アプローチを用いた研究は多くあるが、まだ日本語で書かれたものは多くなく、資料調査をしてもやはり医療関連のものに辿

りつくことが多い。医療分野に限らず、科学的言説を絶対視するような風潮は少なからず見られ、概念としてのナラティブは非常に教育的意義が大きい。補足的資料とあえて限定したのは、入門書や方法論を学ぶような構成ではないことと、その用途には不十分であるからだ。しかし、「物語」という言葉の日常的なイメージゆえに、概念として理解することが難しいこともあるナラティブ・アプローチを、「死」というある意味で普遍的なテーマを軸として描く本書はどんな読み手にも接点を与えてくれると期待できる。

以上の理由により、本書の与えてくれる視座は非常に豊かである。そして、このような考えへの着目は、なにも死と向き合う医療関係者や、人生の終末期だけである必要はない。むしろ、このような姿勢の「日常化」がコミュニケーションを学ぶということではないだろうか。人間関係や就職・就労、ひいては人生の「正しさ」の拠り所のように肥大化してしまった「コミュニケーション」とその「正しさ」という言説そのものを再考するきっかけとしても、本書は大きな足掛かりとなるだろう。

この書評を執筆中に、本書に関して同僚と話す機会があり、このTED スピーカー (自身が事故で手足を失い、ホスピスケアに従事する医師) を教えていただいた。本書の内容との結びつきが非常にあり、ここでも紹介させていただく。

[BJ Miller: What really matters at the end of life]  
[https://www.ted.com/talks/bj\\_miller\\_what\\_really\\_matters\\_at\\_the\\_end\\_of\\_life](https://www.ted.com/talks/bj_miller_what_really_matters_at_the_end_of_life)

宮崎新 (名古屋外国語大学教員)

山口誠 [著]『ニッポンの海外旅行 若者と観光メディアの50年史』ちくま新書 (2010年)

最近の若者は海外旅行に行かなくなった、という言葉を目にしたことがある人は多いだろう。しかしそのことについて、深く考える人はほとんどいないのではないか。本書はそこに視点を置いている。そして著者は、「なぜ最近の若者は海外旅行に行かなくなったのか」だけでなく、「いつから海外旅行は、若者にとって魅力的ではなくなったのか」も問うべきであり、若者の変化だけでなく海外旅行の変化も議論すべきだと言う。なぜなら若者が不変ではなかったように、海外旅行も同じぐらい、ときに大きく変化してきたはずだからである。(pp.5,6) 本書はガイドブックをもとに海外旅行の変化を見ていく構成になっている。

アメリカ人のアーサー・フロンマーは、いくつものガイドブックを出版していた。そして彼は「節約旅行」を提案していた。「節約」という方法を通じて、現地の人々が日常的に使う食堂と移動手段を利用することで、「旅した街の、本物の生活を楽しむ」ことがねらいである。(p.66) さらにそれは、「歩く」旅であるといえる。ここでいう「歩く」とは、貸切バスに乗り、決められたポイントだけを歩くことではない。旅先の人々の日常生活との接点を求めて、人々が織り成す社会的文脈へ入っていくこと、つまり文脈化すること意識化することである。(p.81)

その逆にあるのが、脱文脈化した観光を貸切バスで作出すものである。現在では、カタログ型ガイドブックを片手に、スケルトン・ツアーで数日間の海外旅行をする人が多い。彼らは極端な場合、お金を介した「買い・食い」以外に、現地の人々と接点を持たない。こうして「買い・食い」行動を前に押し出してきた「歩かない」個人旅行が、長い独走の果てにたどりついたのは、旅先の日常生活が伝えてきた歴史や文化から切り離され、お金を介した消費行動だけで辛うじて接点を持つ、「個人旅行」

が「孤人旅行」と化した、脱文脈化する海外旅行の現状である。(p.221) それこそが1990年代の後半から多くの若者たちが「海外旅行そのもの」から離れていった原因であると著者は結論付けている。

本書を読むまで、私は若者の海外旅行離れについてあまり深く考えたことはなかった。考えたとしても、最近海外で病気が流行っているからとか、危ない事件が起きたから、などのような見方しかもてなかった。しかしガイドブックの変化を通じて、海外旅行そのものの変化を読み解くことができ、若者の海外旅行離れの本当の原因を知ることができた。本書を読んで海外旅行の現状や変遷を知り、海外旅行の今後を考えてみてはどうか。

村松真衣

(静岡県立大学国際関係学部 藤巻ゼミ生)